

沖縄本島中南部の若者におけるウチナーヤマトグチ使用 一方言に対する意識から沖縄方言の現状を探る一

下 地 美 紀

I はじめに

1. 方言区画論と琉球方言の位置づけ

現在, 日本には標準語のほかに日本各地で異なった特徴を持つ方言がいくつも確認されている。方言の地理的分類については諸説あり, その中でも東条操の「方言区画論」(東条, 1954) はその後の研究への影響が大きく, 現在も東条の区画論に沿って地理的分類がなされることが多い。安部 (2015) では, 東条の論を用いて「方言区画論と方言境界線と方言圏の比較研究」が行われている。東条の方言区画論で日本語方言は本土方言(東部方言, 西部方言, 九州方言)と琉球方言(奄美大島方言, 沖縄方言, 先島方言)に分類されるが, 琉球方言は本土の諸方言ときわだって異なる性格をもっている(南, 1997)。

上村 (1997) では, 琉球列島は, 沖縄諸島と先島諸島の間に300km弱の島の無い海域があり, この海域が琉球方言を北グループ(奄美沖縄方言群=北琉球方言)と南グループ(宮古八重山方言群=南琉球方言)に分類する自然的境界となっていることが述べられている。東条の方言区画論と照らし合わせると, 奄美大島方言・沖縄方言が北グループ, 先島方言が南グループということになる。さらに北グループは, 1) 喜界島方言, 2) 奄美大島北部方言, 3) 奄美大島南部方言, 4) 徳之島方言, 5) 沖永良部島方言, 6) 与論島方言, 7) 沖縄北部方言, 8) 沖縄中南部方言の下位方言圏に分類することが出来るが, 沖縄本島で話されている方言は, 7) 沖縄北部方言と8) 沖縄中南部方言である。南北に長い沖縄本島は, その中央やや南寄りにある石川地峡を境に, 北の山がちな地形, 「山原(やんばる)」とよばれる北部と, 南の細かい凹凸はあるが高い山は無く比較的耕地に恵まれた隆起珊瑚礁の地域, いわゆる中部と南部に地形的に分類されるが, 方言もまたこの区分に対応して, 7) 沖縄北部方言と8) 沖縄中南部方言に二分される。

以上のように琉球方言は細かく分類されているが, 今日, 近代的な民族語として発展していく道は閉ざされている。現在の沖縄では, あらゆる公的な場面で使用されている言語, そして多くの私的な会話に使用される言語は, たとえ地方的ななまりを帯びているとはい

え, そのほとんどが現代日本語の標準語である。

2. 沖縄県の方言普及における取り組み

沖縄県では, 沖縄県文化観光スポーツ部文化観光振興課が, 2013年に「しまくとぅば」普及推進計画(平成25~34年度)を策定した¹⁾。「しまくとぅば」とは, 沖縄方言で「島のことば」という意味であり, その地域に根差したことばを意味する。計画内で使用されるパンフレット等を見てみると, 県が定義する「しまくとぅば」とは, 旧来の沖縄方言を指すと考えられる。計画の中では, 行政, 県議会, 民間企業, 教育関係者などが参加する「しまくとぅば」県民大会を実施するなど, 次世代へ「しまくとぅば」の継承や豊かな伝統文化の重要性について再認識を図らせる取り組みを行うとしている。この計画では, 平成25~34年度までの10年間を前期, 中期, 後期に3分割し, 戦略的に普及活動を実施しており, その内容は第1表にまとめた通りである。2018年現在は, その中期にあたる。

この計画の事業効果を検証する指標として, 「しまくとぅば県民意識調査」が行われている。2018年時点で最新の調査である平成28年度の報告書²⁾を見ると, 調査対象は沖縄県内(離島含む)に居住する10~79歳の男女個人2,632名で, 調査員による訪問面接でアンケートを実施している。計画では, 「しまくとぅば」の普及目標値として, 平成25年度調査³⁾の中で「しまくとぅ

第1表 「しまくとぅば」普及推進計画期間

【前期：平成25年度~27年度】 県民への気運醸成 「しまくとぅば」に親しみをもたせる
【中期：平成28年度~30年度】 県民への普及促進 各地域への県民運動の波及
【後期：平成31年度~34年度】 県民への定着 「しまくとぅば」の積極的な活動

注) 沖縄県「しまくとぅば普及推進計画」の概要 (<http://www.pref.okinawa.jp/site/bunka-sports/bunka/shinko/simakutuba/keikaku.html>) より作成

ばを主に使う」、「しまくとうばを共通語と同じくらい使う」、「あいさつ程度使う」と回答した58%を基準に、平成28年度には61%、平成31年度には70%、平成34年度には88%とすることを目標としている。しかし、平成28年度調査の報告書を見ると、「しまくとうばを主に使う」、「しまくとうばを共通語と同じくらい使う」、「あいさつ程度使う」の割合は54.1%で3.9ポイント減少しており、逆に「あまり使わない」、「まったく使わない」の割合は41.0%から45.8%へ4.8ポイント増加しており、計画の目標に反して県民の「しまくとうば」使用頻度は低下傾向にある。

また、この調査では「しまくとうば」の定義が明確になされているとは必ずしも言えない。平成25年度調査報告書では、「ここでの「しまくとうば」とは、沖縄県内各地域で伝えられてきた言葉であります。当然、地域での多様性があります」と説明され、例として共通語の「ありがとう」に当たる「ニフェーデービル」（沖縄本島）、「タンディガータンディ」（宮古）、「ニーファュー」（八重山）が挙げられている。そして、「共通語以外の県内各地域で受け継がれた言葉を、ここでは「しまくとうば」として、調査対象とします」と書かれている。確かに例は示されているが、回答者によって、「しまくとうば」と聞いてイメージすることばが異なることが想定され、実際にどのレベルで「しまくとうば」が使用されているか完全には判断がつかない。そこで本稿では、沖縄県民にとって、方言とはどのようなものなのか、どれくらい使われているのか、どういう印象で受け取られているのかを明らかにする。その際、将来の沖縄での方言の担い手になることが期待されている10代、20代の若者に焦点を当てる。

Ⅱ ウチナーヤマトグチ

1. ウチナーヤマトグチの定義とその歴史

永田（2009）によると、現在の沖縄では方言の新語として「ウチナーヤマトグチ（沖縄大和口）」と呼ばれている言語が使用されている。沖縄方言でウチナーとは「沖縄」、クチとは「口から出るもの＝ことば」という意味で、ヤマトは「大和」、本州を表す。つまり、ウチナーヤマトグチとは「沖縄で話されている日本語」という意味である。

このウチナーヤマトグチ発生のメカニズムとして、永田は、その過程を、(1)発生期、(2)発展期、(3)完成期、(4)転換期の4期に区分している。(1)発生期は、共通語を沖縄に導入する目的で開設された1880（明治13）年の「会話伝習所」⁴⁾や1907（明治40）年頃の「方言札

の導入」⁵⁾などの過激な共通語教育の時期である。共通語と大きく言語構造の異なる沖縄方言を母語として育ったこの時期の学童が話す共通語は方言の影響を深く残し、後にウチナーヤマトグチと呼ばれる言語を発生させることになった。(2)発展期は、沖縄方言とウチナーヤマトグチを対等に使い分ける等位併用の時代である。しかし、沖縄方言は使用出来るものの、敬語を含む「公式的な」沖縄方言は使用できなくなっている。この期の話者として、1948年生まれの喜納昌吉氏⁶⁾が挙げられている。(3)完成期は、ウチナーヤマトグチを母語とし、沖縄方言は理解出来ない、または理解できたとしても使用できないウチナーヤマトグチ単一言語話者の時期である。この期の話者として、1968年生まれの比嘉榮昇氏⁷⁾が挙げられている。(4)転換期は、テレビ等のマスコミの影響力拡大、学校教育を通じての共通語教育、観光客との交流、本土への就職・就学等により、ウチナーヤマトグチと共通語の二言語併用話者になった時期である。つまり、ウチナーヤマトグチが生活言語として方言になった時期といえよう。この期の話者として、1986年生まれの比嘉愛未⁸⁾が挙げられている。

2. 沖縄の若者言葉とウチナーヤマトグチ

かりまた（2006）では、沖縄のわかい人の多くは沖縄方言を体系的には所有していないが、中学生、高校生をふくむわかい人のことばには、沖縄方言がいろいろな形で顔を出すと考えられている。「わかい人のことばに顔をだす沖縄方言の要素」として、①沖縄方言の単語がそのままの形でとりこまれたもの、②沖縄方言の形式や意味の影響を強く受けたもの、③沖縄方言にも日本語にもなく、沖縄方言を素材に若い世代がうみだしたもの（かりまたはこれを「うちなースラング」と呼んだ）の3つが挙げられる。①②が世代による単語の入れ替えはあるものの、年齢を問わず見られるのに対して、③のタイプはわかい人のことばにしか見られない。つまり、①と②はウチナーヤマトグチにも見られるが、③は沖縄の若者言葉、沖縄の若者だけが使用する新たなウチナーヤマトグチと言えるだろう。

しかし、全国の方言が消滅しつつある現在、方言はアクセサリ化してしまったのではないかとされている。小林（2004）によると、共通語が後ろ盾となる現代方言は、その性格が伝統方言と大きく異なり、「システム（言語体系そのもの）」から「スタイル（私的な場面で使用される一種の文体）」へ変貌している。方言の現代的機能は、「思考内容の伝達」から「相手の確認と発話態度の表明」へと変化しつつある。さらに、スタイル化した方言は若者たちの間で、共通語のなかにほんの

少しちりばめられる心理的な要素としてのみ使用されつつある。これは方言の「アクセサリー化」と呼ばれ、方言はシステムからスタイル、そして今やアクセサリーにまでその形を変えようとしている。沖縄の若者が使用する方言も、その例外ではない。

また、方言学では、社会階層によることばの違いを表す「社会方言」という概念が存在する(ダニエル,1997)。かつては日本本土(真田,1991)や琉球列島(柴田,1977)でも似たような現象が見られたが、日本のそれは親から子へ受け継がれたり、一人の人間の母語になったりしているわけではないので、「方言」と呼べるかは定かではない。しかし、柴田(1977)の沖縄の例では、社会階級によって語彙のみならず音韻体系までもが異なるという報告があり、特に沖縄では社会階層と言語は深く関係していると言えるだろう。

3. 研究の目的

旧来の沖縄方言やウチナーヤマトグチそれ自体に対する研究は行われており、永田(2009)により、ウチナーヤマトグチの転換期であるとされる現在、若者はウチナーヤマトグチ単一言語話者もしくはアクセサリー感覚で使用していることが推測される。しかし、今後のウチナーヤマトグチないし沖縄方言の存続を担うであろう20代以下の若者の、ウチナーヤマトグチ使用を含む言語使用については、推測されるのみで、その詳細がほとんど解明されていないのが現状である。

したがって、ウチナーヤマトグチのアクセサリー感覚での使用がますます増えているのか、それとも別の形のウチナーヤマトグチが見られるのか、あるいは県の「しまくとぅば」普及推進計画を反映してアクセサリー感覚ではなく沖縄方言に近い形のウチナーヤマトグチの使用が始まっているのかなどを明らかにする必要がある。

沖縄県内各地において受け継がれてきた沖縄方言は、伝統行事等で使用されるほか、組踊や琉球舞踊といった沖縄文化の基層であり、いわば沖縄県民のアイデンティティの拠り所であるともいえよう。そのため、沖縄県の若者の方言使用、特にその中でもウチナーヤマトグチの使用頻度、ことばに対するイメージ等を明らかにすることは、琉球諸語保護活動の一助にもなると考えられる。

Ⅲ 研究手法と調査対象

1. 調査地概要

調査対象地とした沖縄本島中南部は、うるま市・読谷

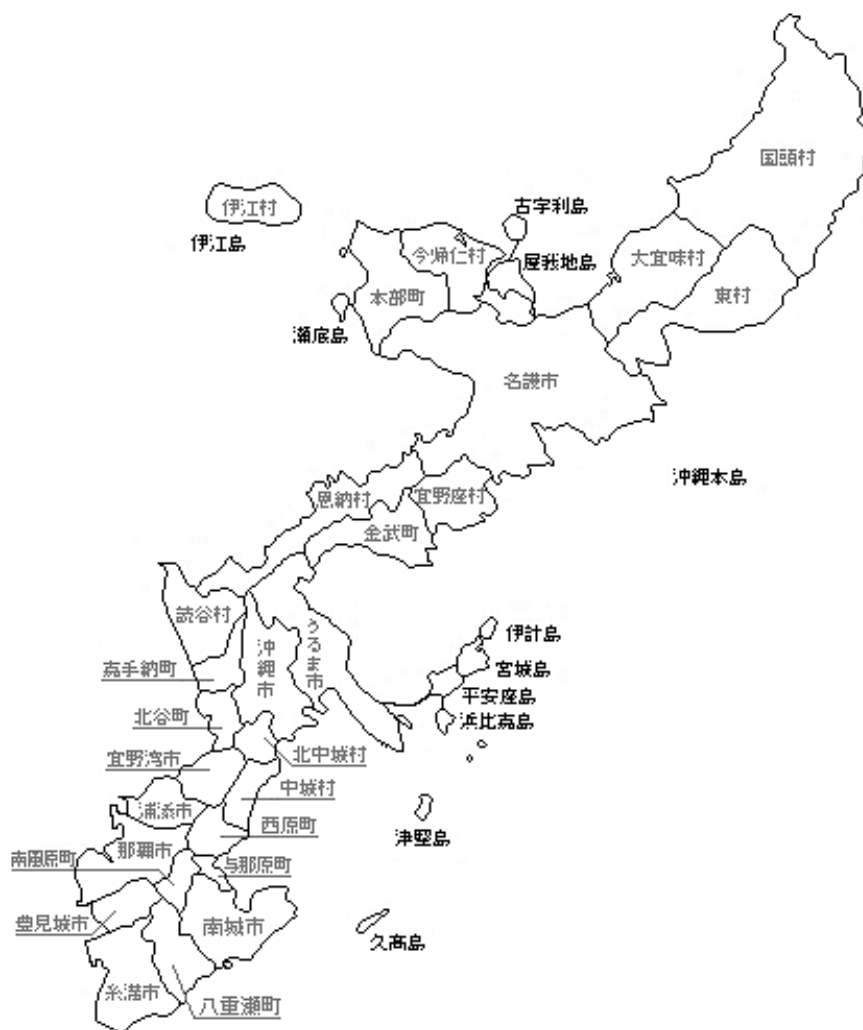
村以南の8市6町3村で構成される。第1図で沖縄県の各市町村の位置を示す。中南部の面積は約478km²で県全体の約21%、本島面積の約40%を占めている。人口は約118万人であり、沖縄県全体の約83%にあたる。年齢階層別の人口推移を見てみると、2017年においては、0～14歳の幼年人口が210,583人(17.5%)、65歳以上の老年人口が234,432人(19.5%)の高齢社会となっている。2012年においては、幼年人口が210,565人(18.0%)、老年人口が190,805人(16.3%)であったので、両年を比較すると、5年間で幼年人口の割合が減少し、老年人口の割合が増加し、確実に少子高齢化が進んでいる⁹⁾。

中南部の一市である那覇市は県庁所在地であり、沖縄の経済・文化の中心地で、若者や観光客も多く訪れる。また、琉球王国の首都であった首里も同市内の一部であるが、そこで使用されていた首里方言は、琉球語を代表する言語でもある。これらのことから、沖縄県中南部は経済・文化の視点からも、沖縄方言という視点からも、沖縄の中心地であり、重要であるといえよう。

2. 調査手法

本研究では、愛知県豊明市において「若年層の方言使用と方言意識」を調査した近藤(2010)を参考に、沖縄県中南部在住の高校生と沖縄県中南部出身の20代の若者を対象として調査を実施した。

高校生に対しては、沖縄県那覇市古島の私立高校、学校法人興南学園の興南高等学校の生徒150名(15～18歳)を対象に、2017年12月4日～8日の期間でアンケート調査を実施した。有効回答数は123名であった。アンケート調査の概要を示す。アンケート後のインタビューが行えないため、ウチナーヤマトグチ・ウチナーグチなどの定義を明確にした上で設問を設定した。属性に関しては、性別・年齢(設問1)のほか、高校生自身、両親、祖父母の出身地について質問した(設問2～4)。それぞれの出身地が言語使用、特に方言の分野においては大きく関係していると考えたからである。同じ理由で、父方・母方の祖父母との同居の有無も質問した(設問5)。言語使用に関しては、沖縄方言が理解できるかどうか、話せるかどうかを質問するとともに(設問6)、家庭で話す時、友人同士で出掛ける時、県内で初対面の人と会う時、県外で初対面の人と会う時、学校で先生と話す時に分けて、方言使用の程度を質問した(設問7)。また、両親との会話、祖父母との会話の頻度の程度も質問した(設問8～9)。さらに、意識と言語使用の関係性を明らかにするべく、沖縄県という地域に対してのイメージ、沖縄県の言葉におけるイメージといった



第1図 沖縄県市区町村地図（本島とその周辺）

注）沖縄県ホームページより転載（<http://www.pref.okinawa.jp/site/kikaku/tochitai/okimap.html#shichouson3>）。

意識的な面を設問10～13で調査した。すなわち、出身地が好きかどうか（設問10）、沖縄県が好きかどうか（設問11）、沖縄の方言を残したいと思うかどうか（設問12）、沖縄の方言のイメージはどのようなものかを選択肢を提示して（設問13）、それぞれ質問した。最後に、後述するような14の語彙に関する使用状況について質問した（設問14）。この設問14は、いまだ明らかにされていない実際の言語使用状況を解明すること、およびその他の設問で把握した属性と言語使用状況との相関を探ることを目的として設定した。

沖縄県中南部出身の20代7名に対しては、アンケート調査とともにインタビュー調査も実施した。インタビューは可能な限り直接面会して行ったが、7名中2名

は2017年10月に電話でのインタビューとなった。直接お会いした5名のうち、1名は2017年8月に神奈川県川崎市、1名は同年10月に沖縄県那覇市、3名は同年11月に東京都内でインタビューを実施した。20代に対して実施したアンケートは、高校生に対してのアンケートとほぼ同じ設問内容であるが、20代に対してはインタビュー調査まで行えたので、あえてアンケート内で「ウチナーヤマトグチ」「ウチナーグチ」の定義を行わず、「方言」という言葉を使用し、「方言」という言葉に触れた時に無意識に何を想像するのか、どのレベルの言葉として捉えるのかをインタビューにおいて明らかにすることを目的とした。

3. 調査対象者の属性

興南高校の生徒 123 名の男女比は、男性 65 名（うち県外出身者 3 名）、女性 58 名（うち県外出身者 5 名）であった。また、両親の出身地については、100 名（81%）が父・母ともに県内出身者、8 名（7%）が父・母ともに県外出身者、残りの 15 名（12%）が父・母のどちらかが県外出身者である。また、祖父母との同居に関しては、110 名（89%）が同居しておらず、父方・母方いずれかの祖父母と同居しているのは 13 名（11%）にとどまった。

アンケート調査に協力して頂いた教員によると「興南高校は県内出身者も多いが、親が県外出身者の生徒も多いので、方言を特にたくさん使用している印象は無い。ただ、部活動ごとに方言の使用頻度が異なるように感じ、特に野球部の生徒は方言を多く使用しているように感じる。授業等で方言教育的な取り組みは行っていない」とのことであった。

また、アンケートとともにインタビュー調査を実施したのは、20 代の男女 7 名で、男性 2 名（A、B とする）、女性 5 名（C、D、E、F、G とする）である。以下、7 名の属性を示す。

A は沖縄県浦添市出身で、両親もともに浦添市出身である。父親は仕事柄県外の方と接することが多く、方言は使用しないとのことだった。祖父母とは同居していない。沖縄には祖先崇拝の風習が強くあるが、A の母方の祖母はユタ¹⁰であり、祖先と会話をするために方言が堪能であるという。A は大学進学をきっかけに上京し、現在は会社員として東京で働いている。沖縄出身者と会う時や帰省した時は方言やウチナーヤマトグチも使用するが、普段は標準語である。

B は沖縄県南風原町出身であり、父親は浦添市、母親は与那原町出身で、ともに県内出身者である。また、母方の祖父母は与那原町出身であるが、父方の祖父母は鹿児島県の奄美大島出身である。祖父母と同居はしていない。また、B の母親が幼い頃には、まだ方言札を使用していたといい、若者が安易に方言（B の母親いわく「間違った方言」）を使用することを良く思っていないとのことであった。B も大学進学をきっかけに上京し、現在は会社員として東京で働いている。沖縄出身者と話す時はウチナーヤマトグチを使用するが、普段は標準語である。

C は沖縄県浦添市出身、両親は父親が那覇市首里、母親が東風平町で、ともに県内出身者である。祖父母とは同居していない。母親は方言を多用するが、父親はほとんど使用しない。父親の実家では沖縄方言を正確に使用することを良しとした。例えば、沖縄方言で「叔母」

は、父母の姉なのか妹なのかで呼び方が変わる。父母の姉の場合、「ウフアヤー」もしくは「ウフアンマー」、父母の妹の場合、「ウフバーチー」または「バーチー」と呼ぶ。C の父親はこういった複雑な方言を正確に使用しなければならないことに窮屈さを覚え、今ではほとんど標準語しか使用しないという。C は就職を機に神奈川県川崎市へ居住地を移動した。勤務先に沖縄県出身者も多いことから普段の生活でも方言とウチナーヤマトグチを使用するが、仕事や県外の方との会話においては標準語である。

D は沖縄県那覇市出身であるが、両親は父親が神奈川県横浜市、母親が宮崎県出身で、ともに県外出身者である。祖父母も県外出身・在住で、同居はしていない。どちらかといえば父親の方と会話を頻繁にするらしく、母親と話す時よりもウチナーヤマトグチを使用するという。D は大学進学を機に上京し、現在会社員として東京で働いている。そもそもあまり方言を多用する方ではないので、現在はほとんど標準語を話す。

E は沖縄県那覇市出身で、父親も同市出身であるが、母親が韓国人で韓国出身である。父方の祖父母と二世帯同居に暮らしている。母親は韓国人のためか、会話で方言を使用することは絶対にならないという。E は大学進学のため一度茨城県で兄と暮らしたものの、卒業して沖縄に戻り、現在は実家で暮らしながら働いている。方言やウチナーヤマトグチは友人や職場の同期と話す際に多少使用する程度である。

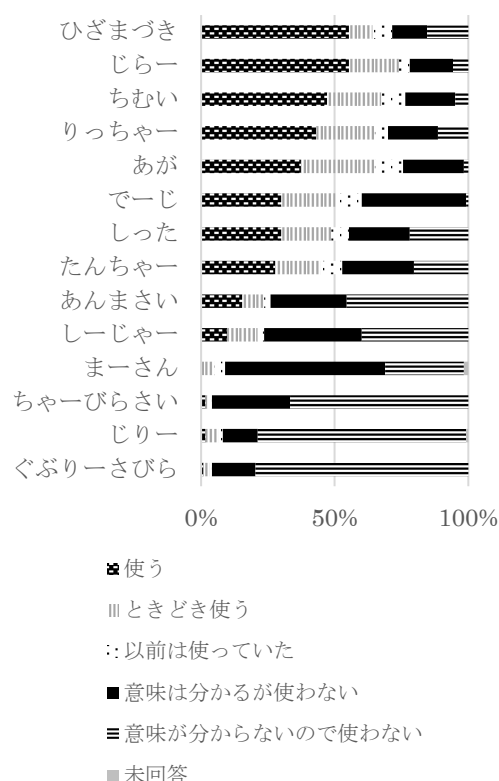
F は沖縄県豊見城市出身で、両親は父親が豊見城市出身、母親が浦添市出身である。父方の祖父母と同居しており、また母方の祖父の家にも頻繁に行っている。しかし、いずれの祖父母も F に対しては標準語を使用するという。また、F は小学 2 年生まで浦添市、小学 5 年生までは那覇市、小学 5 年生から現在は豊見城市と居住地を移動しており、あまり「地元」という感覚を持っていないということであった。F は現在琉球大学の大学院生である。方言はほぼ使用せず、ウチナーヤマトグチは多少使用する程度である。

G は沖縄県那覇市出身で、両親は父親が南城市、母親が那覇市出身で、ともに県内出身者である。祖父母とは同居していない。祖父母とはあまり会う機会がないので、旧来の方言に対してほとんど馴染みがないという。G は大学進学のため一度熊本県で一人暮らしをしたものの、現在は沖縄へ戻り、実家で暮らしながら那覇市の臨時職員として働いている。現在は友人、妹と会話をする際に方言やウチナーヤマトグチを使用することもあるが、多用する程ではない。

第2表 調査に用いた語彙

語彙	意味	琉球語の要素
ひざまづき	正座	②
じらー	なんちゃって	③
ちむい	かわいそう	①
りっちやー	お金持ち(リッチな人)	②
あが	痛い	①
でーじ	とても	①
しった	とても	③
たんちやー	短気な人	②
あんまさい	面倒くさい, 気分が悪い	①
しーじゃー	先輩, 目上の人	①
まーさん	美味しい	①
ちゃーびらさい	ごめんください	①
じりー	同級生	①
ぐぶりーさびら	失礼します	①

注) 興南高校の生徒および20代の対象者に対するアンケート調査より作成



第2図 語彙の使用頻度

注) 興南高校の生徒に対するアンケート結果より作成

IV 言語使用による若者の分類

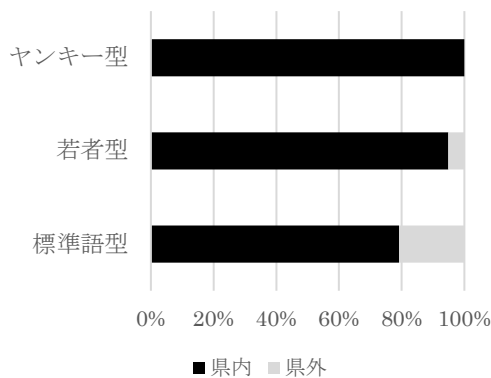
1. 分類方法

興南高校の生徒に実施したアンケートにおいて、設問14で語彙の使用頻度を調査した。調査した語彙は第2表でそれぞれ意味を示した14語である。これは、先に述べたかりまた(2006)の「わかい人のことばに顔を出す3つの琉球語の要素」をそれぞれ含む語彙を入れつつ筆者が選んだものである。

使用頻度についての結果は第2図のようになった。14語のうち「使う」「ときどき使う」と回答した人が半数を超えるのは「ひざまづき」「じらー」「ちむい」「りっちやー」「あが」「でーじ」の6語である。「じらー」「ちむい」「りっちやー」は、琉球語の要素としては異なるものの、インタビューにおいて「親世代は使用しない、若者言葉のイメージ」という声が多く聞かれたが、「あが」「でーじ」は親世代も使用する。「ひざまづき」は標準語にも同様の言葉が存在し、沖縄方言と意味が異なるだけなので、そもそも標準語だと思っている高校生が多いようであった。ここで、「以前は使っていた」まで含めると半数を超えるのが「しった」「たんちやー」の2語である。年を重ねるごとに使用する人と使用しない人に分かれる語彙となっている。「あんまさい」「しーじゃー」「まーさん」の3語に関しては、「以前は使

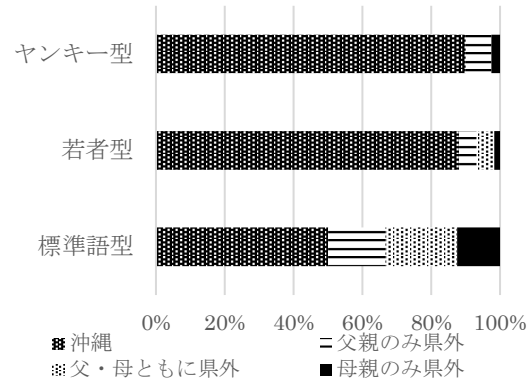
っていた」まで含めても、その使用頻度は著しく低く、使用率は30%を切っている。しかし、これらの語彙は「意味は分かるが使わない」と回答した人が多く、半数以上の高校生が意味理解には至っていると分かる。「使用する人が近くに居るので意味理解には至るものの、自らは使用しない」という立場を取っている人が多いことを示していると考えられる。「ちゃーびらさい」「じりー」「ぐぶりーさびら」の3語は、「意味が分からないので使わない」という回答者がいずれの語においても65%を超えており、高校生の間では、ほとんど理解されない語彙であることが分かった。「意味が分かるが使わない」を含めると、全体の90%を超えることから、この3語は、かりまた(2006)の①というよりも、旧来の沖縄方言であると言える。

ここで、この結果を用いて高校生を分類したい。インタビューを行う中で、ある特定の語彙については「ヤンキー達が使用しているイメージがある」と多くの高校生から意見があり、筆者自身もその感覚は確かに持っている。また柴田(1997)で指摘されていたように、沖縄では社会階層によって使用する方言が異なるという



第3図 出身地

注) 興南高校の生徒に対するアンケート結果より作成



第4図 両親の出身地

注) 興南高校の生徒に対するアンケート結果より作成

特徴があったが、今回の調査対象者からも同じような意見を得た。柴田は「方言」が異なるとしていたが、現在の沖縄の若者は「方言を使用する」というよりも、標準語の中に「方言の語彙」や「方言の文法」を取り込んでいるパターンが多くみられるので、正確に言うと、社会階層ごとに異なるのは語彙や文法だと思われる。よって、今回は、特定の語彙を使用する社会集団を「ヤンキー」と分類する。「ヤンキー」の定義は論者によって異なるが、五十嵐(2009)では、学校の支配的文化に反発し、学歴社会を拒否する不良少年・不良少女のことで述べられている。また、竹内(1987)によると、かれらは徒党を組んで、教師や学校制度に反抗するなかで、学校や社会を異化し、反抗文化を形成するとなっている。本研究でも「ヤンキー」は、ほぼ同様の意味であるが、インタビュー調査の結果、「怖い」というイメージよりは、「少しヤンチャ」なだけで「皆から愛される存在」という声も聞かれた。また、その「ヤンキー」が使用する語彙としては、結果から「一定数使用者は居るものの、特定の人達しか使用しなくなる」語彙である「たんちゃー」と、「意味が分かるが使わない」との回答が多かった「あんまさい」「しーじゃー」をあげたい。これらの語彙はインタビューの中でも「ヤンキーが使用する語彙というイメージ」との声が多く聞かれた。

分類する方法として、以下の手順を踏む。

- 1) 「じらー」「ちむい」「りっちゃー」「あが」のうち、2語以上使用する(「使用する」は、「使う」「ときどき使う」「以前は使っていた」を含む)と回答した人とそうでない人に分ける。ここで1語のみ使用する/全て使用しない人は「標準語型」の話者とする。

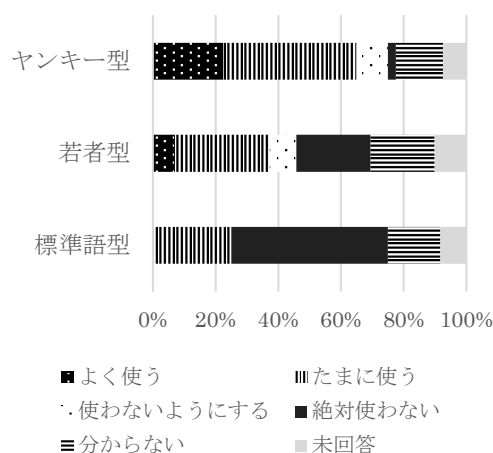
- 2) 1) で2語以上使用すると回答した人のうち、「たんちゃー」「あんまさい」「しーじゃー」の語彙について、2語以上使用すると回答した人を「ヤンキー型」の話者、1語のみ使用する/全て使用しない人を「若者型」の話者とする。

以上の方法で分類した通り、「ヤンキー型」の話者は、若者だけが使用する語彙とヤンキーが使用する語彙の両方を使用する。「若者型」は、若者だけが使用する語彙を使用するが、ヤンキーが使用する語彙は使用しない話者となる。「標準語型」の話者の中で、「若者のみ使用する語彙」は使用しないが「ヤンキーが使用する語彙」は使用する人は見られなかった。また、使用する語彙のイメージに基づいて「ヤンキー型」という名称を採用したが、調査対象者が「ヤンキー」であるといった意味はなく、あくまでも「ヤンキーが使用する」というイメージのある語彙を使用するタイプ」という意味であることは述べておきたい。

この方法によって、123名の生徒を分類したところ、「標準語型」の話者は男性13名、女性11名の24名。「ヤンキー型」の話者は男性27名、女性13名の40名。「若者型」の話者は男性25名、女性34名の59名となった。以下ではこの3タイプに基づいて分析していく。

2. ウチナーヤマトグチ使用の現状と言語環境

「標準語型」「ヤンキー型」「若者型」の3タイプは、語彙の使用頻度に基づいて分類したが、タイプごとの出身地は第3図のようになり、両親の出身地について見てみると、第4図のようになる。「ヤンキー型」と「若者型」の話者に大きな差は見られないものの、「ヤンキー型」には「父・母ともに県外出身者」が居ないのが特



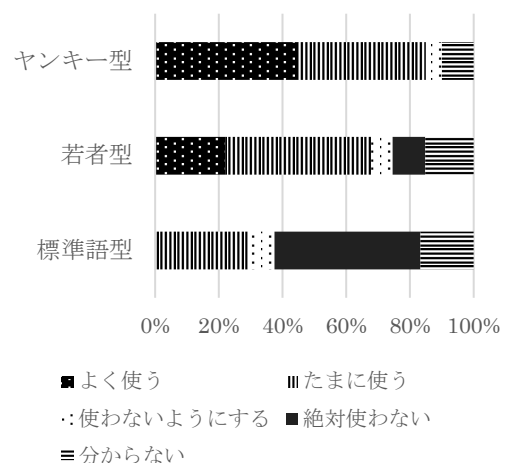
第5図 両親との会話におけるウチナーヤマトグチの使用
注) 興南高校の生徒に対するアンケート結果より作成

徴である。また、「標準語型」の話者においては、その半数の親の、両方もしくはいずれかが県外出身者である。また第5図において「両親との会話におけるウチナーヤマトグチの使用」を見ると、「ヤンキー型」の話者では65.0%が両親との会話においてウチナーヤマトグチを使用しているが、「若者型」の話者ではその割合が37.3%に留まる。さらに、「標準語型」の話者では、「よく使う」が0%で、「たまに使う」が25.0%、また、半数が「絶対に使わない」としている。

以上により、高校生においては、両親の出身地で、「ウチナーヤマトグチを日常的に使用するか否か」がかなり決まってくると考えられる。さらに、両親との会話でのウチナーヤマトグチの使用頻度は、使用語彙の差異、つまり「ヤンキー型」と「若者型」を区別する指標と関係があると考えられる。

第5図が「両親との会話におけるウチナーヤマトグチの使用」であるのに対して、第6図は「友人との会話におけるウチナーヤマトグチの使用」の結果である。全体的な傾向として、家族・友人の双方に対して、「ヤンキー型」の話者がウチナーヤマトグチを多く使用し、続いて「若者型」、「標準語型」の話者の順となる。

対家族と対友人におけるウチナーグチ使用を比較すると、3タイプの話者の違いが明らかになった。「標準語型」の話者においては、ウチナーヤマトグチを「よく使う」「たまに使う」と回答したのは対家族6名(28.0%)、対友人7名(29.0%)で、違いは見られない。しかし、「若者型」の話者においては、対家族22名(37.3%)に比して、対友人40名(67.8%)で、30.5ポイント増



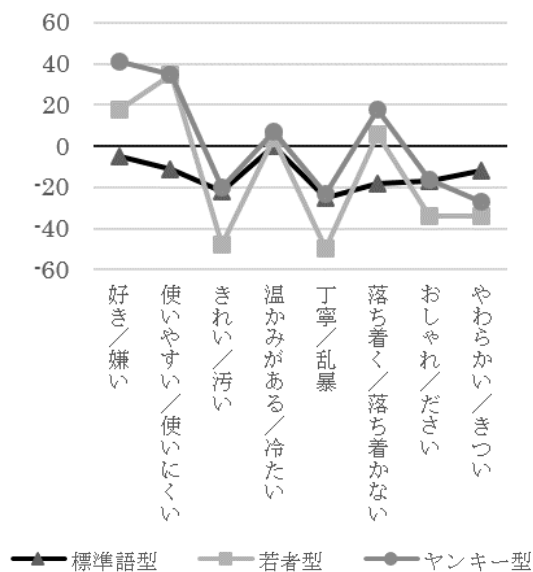
第6図 友人との会話におけるウチナーヤマトグチの使用
注) 興南高校の生徒に対するアンケート結果より作成

加している。「ヤンキー型」の話者でも、この増加傾向は見られるが、対家族26名(65.0%)に比して、対友人34名(85.0%)で、20ポイントの増加に留まり、「若者型」には及ばない。つまり、「若者型」の話者は他の2つのタイプに比べて、「ウチナーヤマトグチの使い分け」を対家族と対友人間で意識的もしくは無意識に行っていると考えられる。

3. ウチナーヤマトグチに対するイメージ

第7図は、3タイプの話者ごとにウチナーヤマトグチに対するイメージを調査した結果である。質問は、「好き／嫌い」、「使いやすい／使いにくい」、「きれい／汚い」、「温かみがある／冷たい」、「丁寧／乱暴」、「落ち着く／落ち着かない」、「おしゃれ／ださい」、「やわらかい／きつい」の8項目とし、話者の意識がプラスイメージ(A)、マイナスイメージ(B)のどちらにより近いかわかるように回答してもらった。そして、近藤(2010)と同じく、友定(1995)を参考に加減法を用いて、「Aにあてはまる」には+2点、「どちらかといえばA」には+1点、「どちらでもない」には0点、「どちらかといえばB」には-1点、「Bにあてはまる」には-2点を与えて比較した。

結果として、「標準語型」の話者においては、全ての項目で0以下の値となっているが、全体的に他の2タイプに比べ、0の値、つまり、どちらでもないというイメージに近い。アンケート内のコメント欄では「普段自分が使わない言葉なので、そもそもイメージがあまり無い」「興味が無い」との回答が得られた。「若者型」と



第7図 ウチナーヤマトグチに対するイメージ

注) 興南高校の生徒に対するアンケート結果より作成

「ヤンキー型」の話者においては、「汚い」、「乱暴」、「ださい」、「きつい」の4つのマイナスイメージと、「好き」、「使いやすい」、「落ち着く」の3つのプラスイメージに分かれた。「温かみがある／冷たい」の項目に対しては、他の項目に比べて「どちらでもない」を意味する0の値に近かった。さらに、「若者型」の話者では、マイナスイメージとプラスイメージを比較すると、マイナスイメージの絶対値がプラスイメージの絶対値に比べ大きいことが分かった。また、マイナスイメージにおいてどの項目も「ヤンキー型」の話者より大きい値を取っており、同じマイナスイメージにしても、その傾向がより強いことが分かった。

V 言語使用における意識問題

1. 言語環境と「方言」の定義

高校生で用いた分類方法を基に、20代の若者へのアンケート結果でも分類を行ったところ、調査対象者A・Cが「ヤンキー型」の話者、B・D・E・F・Gが「若者型」の話者となった。20代の若者への調査では、「方言」という言葉を用いて調査を行い、「方言」とだけ聞いた若者が無意識に何を(どのレベルの方言を)イメージするのかを調査した。

まず、調査対象者A・C、つまり「ヤンキー型」の話者が「方言」と聞いてイメージしたものは「沖縄方言」であった。彼らはインタビューにおいて以下のように

回答している。

A: 自分が使う言葉とか、若い人が使うウチナーヤマトグチを方言だと思ってない。若い人が使うのは、方言っていうよりもただのコミュニケーションツールだと思う。

C: 私たちの世代は方言の末端の末端、浅い部分しか知らない。たぶん正しい方言では無いと思う。自分は沖縄県出身なのに方言に対して「にわか」な感じがする。自分も含めてだけど若い人で方言っぽい言葉を使う人たちを見ると「方言を大して知らないのに知っているフリをして使っている感じ」がする。

以上の回答から、A・Cは若者が使用する言葉をそもそも「方言」として捉えていないということが分かった。A・Cにおいては、両親と会話するときに、方言を「よく使う」「たまに使う」としている。反対に、B・D・E・F・Gにおいては、「方言」と聞いてイメージしたのは「ウチナーヤマトグチ」、とくに「若者が使用するウチナーヤマトグチ」との回答が得られた。B・D・E・F・Gの5人は両親との会話において方言を「使わないようにする」「絶対使わない」と回答している。7人という少ないサンプルの中ではあるが、このように「若者型」と「ヤンキー型」の話者でハッキリと「方言」の定義に差が出たのは、やはり両親との会話における言語使用が関係していると考えられる。以下は「若者型」の話者に対して行ったインタビューの結果である。

B: 「方言」って見て、どちらかと言えばイメージしたのは若者方言だな。ウチナーヤマトグチか、ウチナーグチ(旧来の沖縄方言を意味する)は、理解が出来ないし異国の言葉みたい。特に俺は、親に「間違った方言を使うな」と言われてきたから、親とは絶対に方言を使って話さない。俺の親は、若者方言を間違った方言として嫌ってるわけさ。小さい頃から言われてきたことだから、もう無意識に親の前では使わなくなったな。だから、方言に触れる機会があるのは、友達との会話だけ。

F: 「方言」って聞いたら最初は若者方言が出てくる。もちろん昔の方言があるのは分かるけど、親もおじいちゃんも自分に対しては使わなかったから、馴染みが無い。

G: 昔の(方言)は考えてない。なんかもう次元が違うって感じ。昔方言を使った時に親に「汚い言葉を使うな」って言われたこともあるし、方言に対して恥じらいを覚えたよね。友達とは多少使うけど。

「ヤンキー型」の話者は両親と方言を使用して会話する、もしくは祖父母と両親の会話を聞いて旧来の沖縄方言に触れる機会があったため、「方言」は「旧来の

沖縄方言」のことになる。一方、「若者型」の話者においては、両親との会話で方言を使用してこなかったため、友人との会話で使用する「ウチナーヤマトグチ」が「方言」となる。

しかし、設問 11 の「出身地の方言を残したいと思いますか」に対しては、A～G の全員が、イメージしたのは「旧来の沖縄方言」であり、「とても思う」「どちらかと言えばそう思う」と回答した。これは、「残したい」というワードが入ったことによって、「伝統的」なものを残す」という印象が与えられたことが「旧来の沖縄方言」をイメージするに至った原因だと考えられる。高校生を対象に行った調査でも、設問 12 の「出身地の方言を残したいと思いますか」に対し、75.6%が「とても思う」「どちらかと言えばそう思う」とし、そのうち 99.8%が、残したいのは「ウチナーグチ（旧来の沖縄方言）」であると回答した。

また、「ヤンキー型」である話者 C においては、「方言」と聞いてほとんどの場合「沖縄方言」をイメージしていたが、「方言」のイメージに関する設問では、項目によって旧来の「沖縄方言」をイメージする場合と若者が使用する「ウチナーヤマトグチ」をイメージする場合があった。同一の人の中でも、設問の聞き方や内容によって、無意識的に「方言」の定義が変化していることの表れである。

多くの若者が「方言」を残したいとしているにもかかわらず、「方言」に対してマイナスイメージを持ち、「方言」の使用頻度が低下している現状の矛盾はここにある。つまり、残したいと考える方言は「旧来の沖縄方言」であるが、「方言」のイメージとしては現在使用されている「ウチナーヤマトグチ」、特に「若者が使用するウチナーヤマトグチ」のイメージが強く、そのイメージはマイナスである。「方言」という言葉の中で「旧来の沖縄方言」と「ウチナーヤマトグチ」と「若者が使用するウチナーヤマトグチ」の混同が生じているため、「方言」は「マイナスイメージ」で「使用したくない」が「残したい」という意見になる結果を招いているといえよう。

2. ウチナーヤマトグチのイメージ形成

アンケートにおいて、多くの若者はウチナーヤマトグチに対してマイナスイメージであるとの結果が出たが、本来のウチナーヤマトグチは決してマイナスの意味の言葉のみではない。永田 (2009) のウチナーヤマトグチ発生のメカニズムを見ても分かるように、ウチナーヤマトグチは、生活言語として使用されていた旧来の沖縄方言が共通語と触れ合うことで多少形を変化させた言葉である。そこにはもちろん、マイナスの意味の

言葉もあるが、プラスの意味の言葉も多く存在するはずだ。

以下は、ウチナーヤマトグチのマイナスイメージについて行ったインタビューの結果である。

G：親は基本的に私に対してウチナーヤマトグチを使わないけど、例えば文句を言う時とか、けんか腰になった時、感情的になった時に方言を使っているのをよく聞く。私に対して言っているわけではないけど、そういうのを聞くと、親が使っていても悪いイメージしか無い。正直、若い人でウチナーヤマトグチを多用していると、育ち悪いなと思ってしまう。

F：家族とは使わないけど、私は友達に対しても使わない。大学に入って、ないちゃー（日本本土出身の人）が増えたからっていうのもあるけど。友達でウチナーヤマトグチを使う人も、わざわざ使っている感じがしたり、ワルぶってる人が使っているイメージがある。言葉自体に対してマイナスイメージというよりも、ヤンキーとかやんちゃな人達が多く使っているイメージがあるから、それが言葉の悪いイメージに繋がっている気がする。

E：自分でウチナーヤマトグチを使おうとは思意識的に思わない。友達にはたまに使ってるけど、その程度。ばりばりのウチナーヤマトグチは、「荒れている人達」が使っている感じがするし、「いきってるな」って思う。そういうのがあるから、いくら文化と言われても使いにくい。

以上のインタビューで、「若者型」の話者である彼らはウチナーヤマトグチに対して「感情的になった時に使用するもの」もしくは「ヤンキーが使用するもの」というイメージを大きく持っていることが分かった。このイメージは確かに筆者も感覚として持っているものであった。では、なぜヤンキー達はウチナーヤマトグチを使用するのだろうか。以下は、「ヤンキー型」の話者に行ったインタビューの回答である。

A：俺はいま内地（沖縄の言葉で日本本土を指す）に居るから、日常生活では標準語を話すけど、沖縄の友達と会ったり、帰省したりした時はウチナーヤマトグチを使うよ。どちらかといえば、皆に合わせる感じで。「俺はまだ皆の仲間だよ」っていうアピールかも。そうやって沖縄にいる雰囲気を楽しみたいのもあるし、団結力みたいなのが高まると思う。

C：ヤンキーが方言を使うのは、自分が他の人たちと違うっていうのをアピールするためじゃん。例えば、絵を描いたり、勉強をしたり、スポーツをしたり、そういうので自分を主張する人もいるけど、ヤンキーはそれがウチナーヤマトグチっていう。人と違う必要があるから、皆があんまり使わないウチナーヤマトグチ使ってみたりさ。あとはヤンキーだから、皆があんまり使わない言葉で、かつ、ちょっと悪い言葉を使いたがるんだはずよ。

皆が知らない言葉話を話して、それが悪い言葉だったりするとちょっと格好いいって思ってたかも。

以上の調査結果から、「若者型」と「ヤンキー型」の話者の、ウチナーヤマトグチを使用する理由・使用しない理由をまとめた。

まず、「若者型」の話者は、「若者が使用するウチナーヤマトグチ」は多少使用するものの、常に使用するわけではなく、相手によって使い分けしていることが明らかになった。これは、ウチナーヤマトグチの発生において、本来沖縄方言にはあった「敬語表現」が抜け落ちてしまったことから、目上の人には使用しづらいことが理由の一つであると考えられる。永田(2009)のウチナーヤマトグチ発生メカニズムによると、2番目の「発展期」においては、「方言は使えるが、敬語を含む公式的な方言は使えなくなっている。方言にも、私的にくつろいだ場面で使う方言と公的にかしこまって使う方言があり、老年層では両方使えたが、中年層になると公的にかしこまって使う方言が使えなくなっている」とされる。私自身も、先輩や目上の人に方言を使用する場合、方言の語彙に標準語の「です」「ます」を無理矢理付けて使用していた経験がある。さらに、日本の共通語における若者言葉と同様に、若者がラフな感覚で、よりくだけた表現をする際に「ウチナーヤマトグチ」を用いていることが、家族等に対してよりも友人に対して、より多くウチナーヤマトグチを使用する理由であると考えられる。

次に、「ヤンキー型」の話者である。彼らは「若者型」の話者と同じく“若者のみが使用するウチナーヤマトグチ”も使用するが、「若者型」の話者が使用しないウチナーヤマトグチも使用する。「ヤンキー型」の話者がウチナーヤマトグチを使用する理由としては、仲間内で同じ言葉を使用し、仲間意識や団結力を高めるといった目的の一つがある。そして、より使用人数が少ない言葉を使用することによって、他者との差別化を図るといった目的もあると考えられる。彼らは、「若者型」の話者と異なり、自己主張のためにウチナーヤマトグチを使用している傾向があるため、相手によって使用する言葉を変えない。つまり、「ヤンキー型」の話者は常に“若者のみが使用するウチナーヤマトグチ”と“ヤンキー型”の人のみが使用するウチナーヤマトグチ”の両方を使用していると推測出来る。

また、そんな「ヤンキー型」の話者がウチナーヤマトグチを仲間内のみで使用するツールとしているので、主に友人間でのみ「方言」に触れる「若者型」の話者は、ウチナーヤマトグチ全体に対しても、ウチナーヤマト

グチを使用する人に対しても、偏ったイメージを持ってしまおうと考えられる。

VI おわりに

本研究では、沖縄県中南部の若者における言語使用の実態を解明すべく、アンケート・インタビュー調査を実施した。沖縄県における「しまくとぅば普及推進計画」の県民意識調査において、「しまくとぅば」の普及に必要なこととして、「学校の総合学習等での実施」が74.2%、「テレビ、ラジオ等マスコミを利用したPR」が57.9%となっていた。単純に「意味が分からないから方言を使用しない」の場合、学校教育で方言教育を行うことは最重要である。しかし、現在の若者、とくに方言に馴染みがない「標準語型」や「若者型」の若者にとって、旧来の沖縄方言はもはや馴染みのない外国語と同等との意見が多く、教育現場以外にも日常生活の中でまず身近なものとしなければならないと感じた。さらに、「意味が分からないから」ではなく、「イメージが悪い」ので「意識的に」使用しなくなることも問題点としてあげられる。方言ならびにウチナーヤマトグチのイメージアップを図ることが最優先であると言えよう。

ウチナーヤマトグチの使用には、両親との会話における使用頻度がまず大きな影響を与えることが分かったが、旧来の沖縄方言においても同じであろう。友人たちが使用しない分、旧来の沖縄方言の方が、両親の影響は大きいかもしれない。多くの「若者型」の話者が両親との会話でウチナーヤマトグチを使用しない理由として、若者が使用するウチナーヤマトグチは間違った言葉であり、恥ずかしい言葉と両親から言われた経験があると言っていた。ウチナーヤマトグチないし沖縄方言を若者が使用するようになるためには、両親や周りの大人達が「間違っているから使わない方がいい」と言っている若者の言語使用実態を否定して終わるのではなく、新しい沖縄若者言葉として若者の言語を認めた上で、「正しいウチナーヤマトグチ」「正しい沖縄方言」を教えていくことが重要である。また、両親から引き継ぐことにより身近に感じることで、「方言」のイメージアップに自然と繋がっていくのではないかと考えられる。親自身が正しい方言を理解していないのであれば、マスコミ等を活用して一緒に学んでいくという姿勢が必要なのではないだろうか。

調査結果で、若者、とくに「標準語型」・「若者型」の話者である若者は、「方言」の定義が自身の中でも曖昧であることが判明した。沖縄県が普及推進計画の中ですすめている「しまくとぅば」と、私が実施したアンケ

ートの「方言を残したいですか」に対する回答の「方言」は、両者で同じもの、つまり「旧来の沖縄方言」を指す。しかし、実際身近に溢れているのは、マイナスイメージの多かったウチナーヤマトグチであり、「方言」と聞いた若者がすぐに連想するのはウチナーヤマトグチである。「方言」を残したいにもかかわらず、「方言」がマイナスイメージで使用頻度が上昇しないという矛盾が生まれるのは、「方言」と聞いた時にイメージするものがその時々で異なるからであり、「旧来の沖縄方言」と「ウチナーヤマトグチ」と「若者が使用するウチナーヤマトグチ」の混同が生じているからである。方言普及にあたっては、現在若者のみに使用されているウチナーヤマトグチと、本来のウチナーヤマトグチ、普及させたい旧来の沖縄方言を明確に区別する必要がある、その違いを県民が理解し、イメージを再形成することが重要である。テレビ・ラジオ等のマスコミを利用する際はもちろん、官公庁や民間企業、マスメディアでの方言使用やコンテスト・検定・講座等においても、まず「しまくとぅば」や「方言」が何を指すのかをその時々で明確にする必要がある。

今回の調査では、一高校と数人の20代男女にしか調査を行うことが出来なかったもので、調査結果全てにおいて一般化するまでには至らなかった。しかし、若者が持つ沖縄の方言やウチナーヤマトグチに対する意識を捉えることが出来たのは、方言保護対策を考える上で有効であろう。若者がウチナーヤマトグチや方言に触れ、習得していくことにより、最終的には現在希薄となっていると思われる祖父母との関係の改善、伝統文化の継承、アイデンティティの確立に役立つのではないかと考えられる。

(首都大学東京 2017 年度卒業生)

謝 辞

本稿は、2017 年度、首都大学東京 都市環境学部に出した卒業論文に加筆・修正をしたものです。

本稿を書くにあたって、調査にご協力頂いた興南高等学校の教員及び生徒の皆様、インタビューに協力していただいた皆様にこの場を借りて心からお礼を申し上げます。また、いつも様々な角度からの意見をくださり、丁寧にご指導してくださった指導教員をはじめとする地理学教室の諸先生方、院生の皆様より貴重なご助言をいただきました。誠にありがとうございました。

注

- 1) 沖縄県ホームページ www.pref.okinawa.jp/site/bunka-sports/bunka/shinko/simakutuba/keikaku.html (最終閲覧日 2018/1/4)

- 2) 沖縄県『平成 28 年度しまくとぅば県民意識調査 報告書』2017 年 3 月発行 (<https://www.pref.okinawa.jp/site/bunka-sports/bunka/shinko/simakutuba/documents/kenminishiki.pdf>)
- 3) 沖縄県『しまくとぅば県民運動推進事業 県民意識調査〈報告書〉』2014 年 2 月発行 (<https://www.pref.okinawa.jp/site/bunka-sports/bunka/shinko/simakutuba/documents/kennminnisikityousah25.pdf>)
- 4) 1880 年に明治政府は日本の共通語化を図るため、通訳が国語教員養成のために会話伝習所を設立した。標準語の会話文が沖縄方言で翻訳されるなど、外国語のように共通語を習得した様子が見られる。
- 5) 標準語の使用を強制するため、学校で方言を使用した者に、罰として首から下げさせた木札のこと。
- 6) 琉球民謡を現代風にアレンジしたウチナー・ポップを確立した沖縄の音楽家。
- 7) 沖縄のアコースティックバンド BEGIN のボーカル兼ギター。
- 8) 沖縄県出身のモデル兼女優。
- 9) 2012/2016 年の住民基本台帳人口データより。
- 10) ユタとは、沖縄本島および広く南西諸島においてトランス(変性意識)状態で託宣・卜占・祈願・治病などを行う民間巫女。ユタは南西諸島の民族宗教とくにシャーマニズムを代表する宗教者で現在も人々の強い信仰を集めている。

文 献

- 阿部清哉 (2014): 方言区画論と方言境界線と方言圏の比較研究. 人文, 13, 21-55.
- 五十嵐太郎 (2009): 『ヤンキー文化論序説』河出書房新社, 285p.
- 上村幸雄 (1997): 琉球列島の言語-0) 総説. 亀井 孝・河野六郎・千野栄一編著: 『日本列島の言語-言語学大辞典セクション』三省堂, 311-354.
- かりまたしげひさ (2006): 沖縄若者ことば事情-琉球・クレオール日本語試論. 日本語学, 25(1), 50-59.
- 小林 隆 (2004): アクセサリーとしての現代方言. 社会言語化学, 7(1), 105-107.
- 近藤紗耶 (2010): 若年層の方言使用と方言意識-愛知県豊明市の中学生を対象として. 東京女子大学言語文化研究, 19, 33-49.
- 真田信治 (1991): 日本語のバリエーション. 徳川宗賢・真田信治編: 『新・方言を学ぶ人のために』世界思想社, 12-29.
- 柴田 武 (1977): 都市化と言語の階級差. F.C. パン編: 『環境とことば』文化評論出版, 113-126.
- 竹内常一 (1987): 『子どもの自分くずしと自分づくり』東京大学出版会, 213p.
- ダニエル・ロング (1997): 方言からみた日本語らしさ. 日本語学, 7, 6-13.
- 東条 操 (1954): 第二章 国語の方言区画. 東条 操編: 『日本方言学』吉川弘文館, 18-33.
- 永田高志 (2009): ウチナーヤマトグチ発生のメカニズム. 日本語学, 28(14), 124-135.
- 南 不二男 (1997): 日本語-0) 総説. 『日本列島の言語-言語学大辞典セクション』三省堂, 90-91.